

保育者養成における音楽表現のためのリズム・ソルフェージュ指導法

Instructional method based on rhythm and solfeggio for musical expression in childcare provider training

次世代教育学部こども発達学科

高崎 展好

TAKASAKI, Nobuyoshi

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：音楽教育, 音楽表現, ソルフェージュ, リズム, 指導法

要旨：保育者養成において、ピアノ学習、リズム遊び、こどもの歌の弾き歌いは必要不可欠である。保育者として音楽表現を実践できるようになるためには、ソルフェージュ力を養わなければならない。ソルフェージュを限られた時間の中で、より効果的に習得するためには、階名を読むことに重きを置かず、リズム学習に重点を置く。リズムを正確に読み取るための手段と方法をこの研究で明らかにしたい。

リズム学習がある程度定着すれば、同時に聴音や視唱の学習を行うことも効果的であると考えられる。これらの学習を積むことでリズムに対する理解を更に深め、聴いた音を正しく五線に書き表し、聴いた音を歌う。聴く→書く、聴く→歌う、聴く→歌う→書く、これを繰り返し訓練することによって効果的にソルフェージュの基礎力を高めることができる。指導者が学習者のレベルや状況を正確に把握し、学習を進めることで効果的に成果が表れることが本研究で明らかとなった。

Abstract： In childcare provider training, piano instruction, rhythm play, playing instruments, and singing children's songs are indispensable. To enable childcare providers to engage in musical expression, abilities in solfeggio must be nurtured. To support the effective learning of solfeggio in a limited period of time, solmization must not be stressed—rather, an emphasis should be placed on learning rhythm. This research elucidates ways and methods of accurately reading rhythm.

Teaching childcare providers rhythm can support their effective learning of both pitch recognition and sight singing. These abilities together can lead to the attainment of a deeper understanding of rhythm and can enable childcare providers to sing and to transcribe heard sounds in musical notation. Childcare providers' basic abilities in solfeggio can be effectively enhanced through practice with hearing, then transcribing; hearing, then singing; and hearing, then singing and transcribing. This research revealed that instructors must accurately determine learners' levels and abilities to ensure that lessons yield effective results.

Keywords： Music education, musical expression, solfeggio, rhythm, instructional method

I はじめに

ソルフェージュとは、音楽的な基礎を養うものである。楽譜を見て正しい音価・音程で歌う、律動を正確に読み取り奏でる、音を聴き取り正しい記譜法で楽譜に表す、つまり“読む”“聴く”“書く”を正しく行うことである。ソルフェージュを身に付けることで、新規に楽器演奏を始める際、その習得が早くなる。音楽

表現に必要なリズム感・呼吸・フレーズ感など、自然な音楽の流れの習得にも苦勞することなく表現できるようになる。楽器演奏上級者でも、ソルフェージュの学習が疎かだと演奏技術の習得に伸び悩むのである。

昨今、定年退職もしくは、60歳以降に趣味を深めるために音楽や楽器を始める方が少なくない¹⁾。正しいソルフェージュの学習を進めていくと、3ヶ月程度で簡単な楽譜であれば手助けなしに読譜できるようにな

る。また楽器演奏においてもリズムも正しく一定のテンポで演奏できるようになる。大人になってからでもソルフェージュ力は学び方次第で身に付くのである。よって、年齢に関係なく訓練によってソルフェージュ能力は掘り起こすことができるのである。

II 研究目的

保育者養成において音楽表現をするためのソルフェージュ力は必要不可欠である。

保育現場において、こどもの発達に音楽が果たす役割は非常に大きく、音楽は生活の一部として取り入れられている。多くの保育園、幼稚園では、音楽に親しみ、創造性を養い、豊かな情操を育てている。

保育者を目指す学生にとって、ピアノ学習は必修であり、ピアノを演奏するためのソルフェージュ力の習得はとても重要である。幼少よりピアノを習ってきた学生にとっては、それほど苦勞するものではないが、大半の学生がピアノ初心者であり、習得に苦勞と時間を要する。幼稚園教諭、保育士資格取得には、ピアノはバイエル100番程度を終了し、童謡や唱歌などの弾き歌いをマスターする必要がある。限られた時間の中で、音楽の基礎、知識、楽譜を読むためのノウハウを習得するためには、多くの練習時間と努力を要するのである。

ピアノを演奏する上で、苦勞することは読譜である。この読譜力を向上させることで、ピアノやその他の楽器の演奏も比較的効率が上がる。

楽譜を見て、楽器が演奏できるようになれば、音楽を楽しむことができる。演奏している本人が楽しむことができなければ、その音楽の楽しさや良さは、指導は勿論のこと、聴いている人には伝わらない。

奏者が表現することの楽しさや音楽を奏でる素晴らしさを体感することが表現する上で何より重要なのである。

音楽の知識、読譜力、表現力、創造力、豊かな感性を身に付けるため、ピアノ学習と併せて、ソルフェージュ学習が必要である。

音楽指導は、指導者の技量で良くもなれば、悪くもなる。これから保育者を目指す学生にとって、音に関心を持ち、音楽を楽しみ、表現力を養うことが何より重要なのである。

ソルフェージュを限られた時間の中で、より効果的に習得するためには、階名を読むことに重きを置かず、リズム学習を習得することが重要であると考え

る。音符の「高さ」ではなく「長さ」つまり、リズムを理解することで他者に頼ることなく、楽譜を自身の力だけで読む力を身に付ける。また、指導者が学習者のレベルや状況を正確に把握し、学習を進めることで、より効果的に学習成果が得られる。本研究の目的は、ソルフェージュにおけるリズムを正確に読み取るための手段と方法を示すことにある。その手段と学習方法が効果的で有効であることを明らかにしたい。

III 調査方法

幼稚園教諭、保育士養成課程におけるソルフェージュ学習の必要性を明らかにするため、本研究では環太平洋大学 次世代教育学部 こども発達学科に在籍する学生60名を対象に「音楽表現のためのリズム・ソルフェージュ指導法」の授業を実施し、受講後にアンケート調査実施した。

①対象

岡山県私立 環太平洋大学
次世代教育学部こども発達学科1年学生
器楽演習ⅠⅡ履修者60人

②実施日・場所

2015年9月14日 1時間実施
環太平洋大学 芸術センター内音楽室

③目的

リズム・ソルフェージュの指導法の手段と方法が効果的であるかについて明らかにする。

④方法

リズムを読むために音符・休符毎に定義付けをした簡単な言葉を付け、ゆっくりとした一定のテンポでリズムを読みながら、同時に手でリズムを叩く。この際、休符をしっかりと意識し、メトロノームや指導者の刻む一定のテンポに合わせてリズムを歌う。リズムは段階的に難易度を上げ、学習者の能力に応じて、速度、課題を適切に選び学習を進める。なお、授業内容、学習の進め方については、研究方法に示す。

IV 結果と考察

調査対象の学生60人中、60人回答。アンケート回収率は100%。本調査からは以下の結果が得られた。

45%の学生がピアノを習っていたと回答。ピアノ経験年数に関しては、1～3年15%、4年～6年5%、7年～9年8%、10年～12年10%、13年～15年7%である。(図1参照)

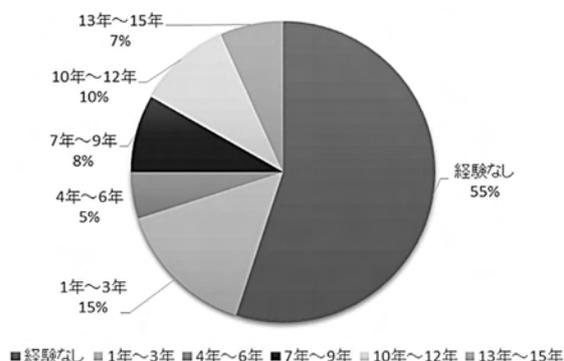


図1 授業参加者のピアノ経験年数について

ピアノを習い始める年齢により学習進度、習熟度は異なるが、1年～3年の経験年数ではバイエルからソナチネ程度であり読譜にまだ時間を要するレベルである。7年以上ピアノを習っている学生に関しては、ピアノ基礎教材である、ハノン、ツェルニー練習曲、インベンション、ソナタなどは終了しており、ソルフェージュに関して十分な素養を持っていると考えられる。

今回の研究調査対象の50%の学生は楽譜(リズム)が読めると回答。残り50%の学生は楽譜を読むことに抵抗を感じると回答。また68.3%の学生は、読譜をしてピアノ演奏や視唱すると難しいと感じると回答。過半数の学生が読譜やピアノ学習に苦労していることがわかった。

授業後にアンケートを実施。結果を以下に示す。

アンケート調査内容と結果

- ・リズム・ソルフェージュは理解できた。 96.6%
 - ・リズムに対するイメージの変容があった。 83.3%
- リズムに対してどのような変容があったか。

【自由回答】

- ・リズムを読むことがたのしくなった。 14人
- ・リズムが苦手だったがこの方法だと練習できる。 14人
- ・読譜に抵抗がなくなった。 10人
- ・この学習方法はわかりやすく効率的だと感じた。 25人
- ・今はまだ難しいが、この方法で練習すればリズムが読めると思う。 18人
- ・この学習方法は楽しいと感じた。 15人
- ・言葉に例えることで効率よくリズムが覚えられた。 1人

- ・やはり、楽譜を読むのは難しい。 1人
- ・リズムを声に出して読むことができた。 98.3%
- ・リズムを拍に合わせて叩くことができた。 95%
- ・リズムを歌いながら叩くことができた。 95%
- ・もっと学習したいと感じた。 83.3%
- ・この指導方法は理解しやすいと感じた。 96.6%

1時間という限られた時間の中で、リズム・ソルフェージュ学習を行うことにより、アンケート調査結果からもわかるように学習後に大きな変容が見られた。

調査対象の96.6%の学生が、リズム・ソルフェージュ指導法を理解し、わかりやすいと回答した。ピアノ経験者はもちろん、未経験者で読譜をすることが苦手な学生も90%以上がこの学習方法でリズムを理解し、読譜力の向上が見られ、この指導法を取り入れたソルフェージュ学習が効果的であることが明らかとなった。この指導法で学習を継続することで更なる学習効果が期待でき、ピアノ学習にも効果が出ると予測される。よって、保育者養成において、音楽表現のためのリズム・ソルフェージュ指導法は有効であることが明らかとなった。今後、ピアノ学習や弾き歌い、リズム遊びなどにどのように作用するのかも調査を行い、研究を進めていきたい。

V 研究方法

1. 楽譜のリズムを正しく読む

読譜をする際、階名を読むことに比べて、リズムの読み取りは間違いやすく、疎かになりやすい。特に初心者は階名を読むことに重きを置くため、リズムを同時に読み取ることができない。音符は音の高さ、長さを表すために使用される。音の高さは五線の仕組みを理解することで階名は書き込めば読むことはできるが、リズムは読み方のルールを習得していなければ読むことができない。読譜する上で、最初に躓くのがリズムなのである。楽譜上に難しいリズムが出てくると、たいてい読譜することに挫折してしまうのである。そこでリズムの読み方のルールを独立して訓練する。

階名を読むことに重きを置かず、リズムを読むために音符毎に定義付けをした簡単な言葉を付け、ゆっくりとした一定のテンポで正確に読む力を養う。

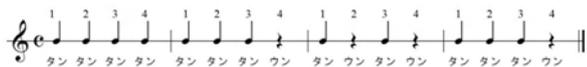
4分音符「タン」、8分音符「タタ」、16分音符「タカタカ」、休符に関しては、4分休符「ウン」、8分休

符「ウ」, など音符毎に読み方の定義付けをする。

始めは一定のメトロノーム・テンポ=60で止まらずに声に出して読む。それができればリズムを手で叩く。最終的にリズムを歌いながら手で叩く。これらを繰り返すことでリズムを読むことに慣れていく。

ここからは譜例を基に段階的な練習課題を示す。

譜例1 4分音符(タン) + 4分休符(ウン) 2)



譜例1は, 1拍に1つの音符が入る, 極めて簡単な課題で音符と休符の読み方の違いをマスターする。

譜例2 8分音符(タタ)



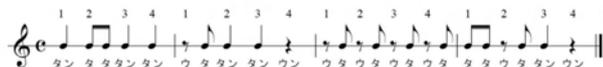
譜例2は, 1拍を2等分するリズムパターンなので, ここでは指導者は“1, 2, 3, 4”と拍を数えるのではなく“1, と, 2, と, 3, と, 4, と,”と拍を数え, 1拍に2音符入るリズムを定着させる。

譜例3 連続する8分音符(タタタタ)



譜例3は, 譜例2同様に1拍を2等分するリズムが連続するパターン。ここでは8分音符のリズムが速くなったり, 遅くなったりしないように均等にリズムを読むよう注意する。

譜例4 8分休符(ウ)



譜例4は, 4分休符と8分休符の違いを理解する。8分休符は特に表拍と裏拍を正確に感じることを大切にする。

譜例5 16分音符(タカタカ)



譜例5は, 1拍を4等分するリズム。

ここでは8ビート(1拍を2等分する拍子)に慣れてきたら16ビート(1拍を4等分する拍子)で拍を感じ, 16分音符を偏りなく均等に読むようにする。

譜例6 8分音符 + 16分音符(タツタカ)



譜例6は, 譜例5同様に16ビートで拍を数える。

タツタカのリズムはタカタカの前半の2音がタイになって延ばされた形である。

譜例7 16分音符 + 8分音符(タカタ)



譜例7も同様に16ビートで拍を数える。このタカタのリズムはタカタカの後半の2音がタイになって延ばされた形である。16ビートの拍子よりも速くならないように注意が必要である。

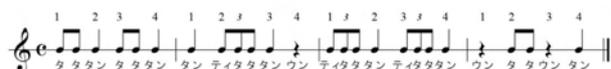
譜例8 16分音符 + 8分音符 + 16分音符(タタータ)



譜例8は, シンコペーション(タタータ)のリズムパターン。このタタータは, タカタカの中の2音がタイになって3つめの音が延ばされた形である。このリズムパターンは言葉に置き換えて練習すると印象的かつ効果的である。

例えば, フルーツ, ステーキ, クレープ, スケート, リピート, テヌート, フルート…など, 探せば数多くあるシンコペーションの言葉でリズム遊びをしないとリズムを素早く理解する良い手段と考える。

譜例9 3連符(ティタタ)



譜例9は, 1拍を3等分(3連符)するリズム。

1拍を均等に3等分すると, 理論上では割り切れない数字となるため, 習得にはやや時間を要する。では, どのようにしたら正しく均等に読めるのか。

8ビートは1拍を2等分するリズム。これは1/2で割り切れる拍なので演奏は容易い。この8ビートを

3拍毎にアクセントを付けてみる。均等に3等分して3連符の形が出来上がる。3拍を1拍として数える複合拍子を例に考えると良い。ここでは、拍の感じ方よりも、まず3連符を均等に読む練習をおこなう。そうすることで3連符の感覚が身に付くのである。

これらの示したリズムパターンをメトロノーム・テンポ=60で一定に保ち、繰り返し読む練習を行う。音符の読み方の定義と形状を理解することで例題以外の楽譜でも声に出して読めるようになる。またメトロノームに合わせて読むと、ゲーム感覚で音符の音価とリズム感が養える。

2. リズムを演奏する方法

2-1 リズムの仕組みを知る

リズムの読み方をマスターすると同時に、手でリズム打ちを行う。前述と同様にメトロノームや指導者の刻む一定のテンポに合わせてリズムを手で打つ。

ここまでできれば、音符の読み方の定義に従い、歌いながらリズムを手で叩いてみる。リズムを唱えながら手で叩くことができれば、リズムの仕組みを理解できたことになる。

リズムを演奏する上で大切なことが一つある。必ず休符を正確に感じ表現することである。手でリズムを叩く際に、休符は両手を開いて「グー」で握ること。この時にプレスができると好ましい。音が鳴っている時だけが音楽ではなく、音楽は休符の存在と感じ方がとても重要な役割を果たしている。休符は、音楽のフレーズ感を生み出し、またプレスをすることで躍動感が生まれる。休符は呼吸である。呼吸のない音楽ほど聴いていてしんどいものはない。休符を感じ読み取ることで、より正確にソルフェージュ力を身に付けることができる。

応用力を身に付けるため、あらゆる楽譜のリズムパターンに慣れ親しむことも必要である。リズムの基礎を徹底的に積み上げるための教材^[1]は有効であり活用できる。容易なリズムから複雑なリズムまで網羅されており、この著者もリズムに対する基礎訓練が必要であることを唱えている。

リズムの基礎力をさらに向上させるため、身近なバイエル等のピアノ初級者用楽譜を使用し、リズム練習を積むことで読譜力が定着する。読譜をする際は、必ずリズムを歌い、手で打つことが重要である。

これを繰り返し行うことで、リズムに対する応用力が身に付き、音符の「高さ」の学習へとステップを進める。

2-2 リズム学習の要点

1. 各リズム型の正確なリズムを習得する。
2. 拍子感を養う
3. 全体の流れを把握する。
4. 複声リズム：二声のリズムなら上声と下声の流れを上下ばかり見ないで、横の流れを個別に意識する。
5. テンポの保持：手足など身体の動きで拍子を取るのではなく心の中で同じテンポを保って拍を刻む。速くなったり、遅くなったりせずに正確にリズムを取り、長休符があってもテンポを狂わせないこと。

2-3 指導上の注意点^[1]

1. 課題を行う前に必ず頭の中で読んで理解する時間を与える。
2. リズムを打ち始めたら、多少のミスをしてでも止まらずに一定のテンポで終わりまで進める。これは初見演奏には大切なことである。
3. 課題の意図を読み取って音楽的に実施すること。
4. 正確に行うこと。できるまで徹底して行うこと。
5. いつも同じようなテンポばかりでなく、時には速く、時には遅いテンポで打ち、テンポに対する感覚を養う。速いテンポでは即興性を鍛え、遅いテンポでは、より正確なテンポで拍がずれないように緻密さを鍛える。
6. 学習者の能力に応じて、必要としている課題を適切に選ぶこと。
7. 複雑なリズムは最小単位まで分解して読む。

3. 聴音の基本学習

3-1 聴音のルールと方法

聴音とは、ピアノ等で演奏された、単旋律または多旋律、和声などを聴き取り、楽譜に書き起こすものである。音を聴き取るだけでなく、楽譜を丁寧にかつ正確に書くことも要求される。楽譜を正しく書く知識を習得することで、読譜力も数倍向上する。より正確な読譜力を身に付け、豊かな表現、豊かな演奏のための第一歩を踏み出すために、ソルフェージュ学習において聴音は必修課題である。次に聴音を始める際のルールを示す。

聴音をする際は、五線を準備し、必ず鉛筆を使用する。芯が少し柔らかいB (Black) を使用することが好ましい。シャープペンシル等は芯が細く、また色も薄くなるため聴音には不向きである。また聴音の最中

に芯などが折れる可能性が少しでも考えられる筆記用具は避けるべきである。

五線紙に音部記号を正しく書き、与えられた課題の小節数に応じて五線を小節線で区切る。4の倍数で小節を区切ることが好ましい。

①カウント

拍を数えられるように鉛筆を持たない方の手でカウントを打つ。親指から拍数を決め、4拍子、3拍子を使い分ける。始めはカウントを打つ音を出しても良いが、徐々に音を出さずにカウントできるようにする。

②主音と主和音

聴音開始直前に、その調の主音と主和音が演奏されるので聴く。開始音を外さないためにも、この主音と主和音の確認は必要不可欠である。初心者には、その調の音階をゆっくりと聴かせることも重要である。

③演奏（リスニング）回数

課題を演奏する回数は、8小節課題の場合、通奏1回、前半の4小節分奏3回、その後、通奏1回、後半の4小節分奏3回、そして、最後に通奏1回。1分後に終了。各演奏の間隔は30秒程度。

④書き取りと仕上げ

聴音は、始めから音符で書くのではなく、薄い線 / (スラッシュ) または、・ (点) で音を書き取っていく。これは間違えて訂正する際に消しゴムで直ぐに消せるようにするためだ。始めから強く濃い音符を書き取ってしまうと訂正に時間を要するので避けた方が良い。分奏の中で音に確信が持てたら符尾、符鉤を書き足す。その際の符尾の長さはオクターブ、もしくは五線の3本分ぐらいが好ましい。また符尾の向きは五線の第3線を超えるものは下向きに記す。この時、前後の音符によって例外も生じるので学習、確認^[2] する必要がある。

最終的には、符頭を楕円形に仕上げ、小節内の拍数が合っているか、休符などが抜けてはいないか等、最後の通奏の際に、頭の中でソルフェージュ（階名を使って歌う）しながら確認できれば優秀である。

聴音上達のための秘訣は、聴いた音を正しく丁寧に楽譜にしていくことである。では美しく正確な楽譜の定義をここに示す。

- ①音部記号が正確に表記できているか。
- ②小節線は均等に書けているか。また複縦線・終止

線は書けているか。

- ③音符の符頭の大きさ、符尾の長さや向き、符鉤の形や向き、付点の位置は適切か。
- ④小節内の音符や休符が均等に拍割でき配置に偏りがいないか。

これらを守ることで美しく正確な楽譜を書くことができる。訓練を繰り返すことでよりスピーディに、かつ正確な楽譜が書けるよう癖を付ける。正しく楽譜を読み・書きできる力を養うことは、ソルフェージュ上達の近道である。

次に簡単なリズム・スケール聴音を紹介する。ここでは、前述したようなリズムパターンをステップアップ形式で順次使用して徐々にレベルアップを計れるよう進めていく。

3-2 初歩的な聴音課題

ハ長調 2拍子のリズムパターンとスケール聴音

■第1課題 四分音符と四分休符



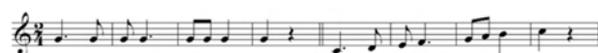
■第2課題 1拍を2等分した八分音符



■第3課題 付点四分音符を使ったリズム



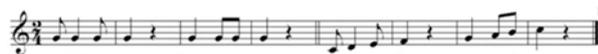
■第4課題 付点四分音符の応用と八分休符の導入



■第5課題 付点八分音符を使ったリズム



■第6課題 シンコペーションを使ったリズム



■第7課題 1拍に4つ音符が入るパターン



■第8課題 1拍に3つ音符が入るパターンA

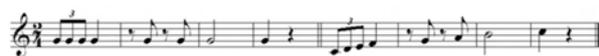


■第9課題 1拍に3つ音符が入るパターンB



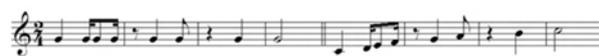
■第10課題 1拍に3つ音符が入るパターンC

三連符



■第11課題 1拍に3つ音符が入るパターンD

切分音（シンコペーション）



聴く→書く、聴く→歌う、聴く→歌う→書く、これを繰り返し練習することによって効果的にソルフェージュの基礎力を高めることができる。

この学習が一通り習得できれば、大体のリズムパターンは習得でき、楽譜を読むことに困らない程度の力は身に付くだろう。

次に簡単な旋律を覚えて書く暗記聴音、更に4拍子、3拍子の2度、3度音程を含む順次進行の簡単な旋律聴音、次に跳躍進行4度、5度音程を含む旋律聴音、臨時記号を含む旋律聴音、複合拍子の学習、調号を用いた旋律聴音、と学習レベルを上げていく。

目的に応じた課題をレベルに合わせて学習を積み重ねていく。ある程度まで学習を積み重ねば音楽の素養は身に付くが継続的な学習が必要である。

4. ソルフェージュ学習

4-1 階名唱（旋律をピアノに合わせて歌う）

ソルフェージュは、聴こえた音を頭の中で階名に変換されなければならない。しかし、訓練が成されていないと聴こえる音を階名に変換することは非常に難しい。聴いた音を階名に変換する力は、幼少時より音楽教室などでピアノに合わせて階名を歌うことで身に付く。生まれつき備わっている力ではなく、幼児が言葉を音で覚え、文字に表すことに似ている。聴こえる音を判断する力は、幼少時よりそれ相応の過度な訓練が必要になる。しかし、青年期からのソルフェージュの習得には簡単な訓練と学習によって最低限のソルフェージュ力を身に付けることができる。

ピアノで、ドから始まるハ長調の音階を始めに聴く。“ドレミファソラシド”は、幼少時に“ドレミのうた”などからその音階順序を学習し覚えている。これは西洋音楽の音階の順序である。この8個の音を聴き分ける訓練から入る。

第一段階として、主音となるドを演奏開始前に必ず鳴らし確認する。第一課題で使用する音は3個（ドレミ）までとする。

これらの音の演奏順序のパターンを変えて演奏す

る。

例) ドレミ、ミレド、レミド、ドミレ、ミドレ、レドミ…

譜例1

指導者は適当に旋律に合った伴奏を付けると良い



譜例2



これらをピアノで演奏し、前半は指導者が歌い、後半は学習者が歌う。この繰り返して聴こえる音を階名で判断して歌えるように訓練する。3個の音が判断できるようになれば徐々に音を増やしていく。ハ長調で使用する音階固有音は7個。パターンを変えて色々試してみる。この繰り返しの訓練で、聴く、歌う、書く、の連動スピードが向上し、音感が身に付くのである。また一定のリズムパターンから変化を付けていくとリズム感と拍子感も養うことができる。

5. ソルフェージュ必須教材

コールユーブンゲン^[3]は、音楽大学や音楽科指導者を目指す者にとって避けては通ることのできないソルフェージュの必須課題である。

この教材の学習目的を著者はこう述べている。

- ①音楽の基礎学習と音程を正しくとる練習とリズム的練習。
- ②美しい音を出すことに配慮してある小練習曲。
- ③和声学初歩を含む音楽通論の繰り返し学習。
- ④芸術的に正しいニュアンスの習得。
- ⑤良い発音と正しいアクセントの学習。
- ⑥全ての長調・短調の調号を網羅した極めて難しい練習課題。
- ⑦慎重、精密な演奏を実行する為の伴奏付き、また

は無伴奏でのトレーニング^[3]。

この教材は、基本的に全て単旋律で書かれている。和声感覚を養うためにも指導者はその単旋律に伴奏を付けなければならない。指導者は和声法を熟知していなければ、コールユーブンゲン指導に支障を来すのである。上記⑥で示された極めて難しい課題に伴奏を付けるためには、相応の演奏テクニックも必要不可欠である。これを達成することが難しい場合は、指導者または学習者のために伴奏集^[4]が出版されているので、これを併用するとスムーズな学習指導が可能となる。この教材では、音程、リズム、派生音、調号（長調・短調）と順序立てて、しっかりと視唱力を身に付けることができるため、副教材としては非常に有効である。また、コンコーネ^[5]もソルフェージュの副教材として有効であり、純粋な発声法や、旋律の歌い方の音楽的な処理を学ぶためにも効果がみられる教材である。これらの習熟度を測る手段として、学習レベルに応じた新曲視唱課題を実施する。新曲視唱では、ソルフェージュ力がどの程度、身に付いているかを計る手段としては最良であると言える。

VI まとめ

本研究のソルフェージュ指導法の手段と方法は、これまでの教員生活で培ってきたものである。この論文で提示した譜例は一部に過ぎないが、読譜やリズム・ソルフェージュをスムーズに行うための研究で書き溜めた自作譜である。

ソルフェージュ指導は、学習者の状況やレベルを把握せずに指導を進めると、ソルフェージュに対し苦手意識を植え付けることにもなり兼ねない。学習者の状況を正確に把握し、学ぶべきこと、必要とすることは何であるかを判断して指導することが指導者に求められる。

指導者は段階的に学習目標を立て、ステップアップ形式で状況に応じた課題作成並びに年間指導計画、指導案の作成を行い、計画的に構築することが最良なソルフェージュ指導法であると考えられる。

保育者は音楽を表現し、音楽指導する立場であるため、ソルフェージュの学習を避けて通ることはできない。

ソルフェージュを限られた時間の中で効果的かつ効率良く習得し、併せてピアノや歌唱などの演奏表現能力を高めるには、ソルフェージュの学習方法と指導法に掛かっているとと言える。今後は、保育者育成のため

のソルフェージュの効果的な習得、並びに教材開発の研究を進めていきたい。

注記

1) Webページ

作成者：ニフティ株式会社

Webページタイトル @nifty何でも調査団 あなたの声を作る“オトナ”の本音レポート！

URL http://chosa.nifty.com/cs/catalog/chosa_report/catalog_120802000837_1.htm

アクセス日付2014.7.8.

定年後は「趣味を深める」／定年後に始めたor始めたい習い事調査

アンケート実施日時：2012年7月20日～7月26日／有効回答数：3,607

2) 譜例に使用した全ての楽譜はFinale使用の自作。

引用文献・参考文献

■著者名、出版年、『書名』、出版社、総ページ数

[1] 呉 暁／桐山春美、1995、『リズムの基礎』、音楽之友社、74p

[2] 菊池有恒、1987、『楽典 音楽家を志す人のための』、音楽之友社、432p
「音符と休符の記譜法」71p参照

[3] 信時潔 訳、1925、『全訳コールユーブンゲン』、大阪開成館発行、90p

[4] 平井康三郎、1970、『コールユーブンゲン伴奏集』、全音楽譜出版、143p

[5] 畑中良輔（編著）、2001、『CONCONE 50 LESSONS OP.9 MEDIUM VOICE』、全音楽譜出版社、115p